

研究ノート

価値観を問い直すダンスワークショップの試み

—市川まや/Kyoto Dance Exchange によるダンスワークショップ
「ジゼル～そう遠くない未来、わたしはオムツを履くだろう」とおして—

草山太郎

Reexamining Values Through Dance Workshops:
Insights from “Giselle: In the Not-So-Distant Future, I Will Wear Diapers”
by Maya Ichikawa/Kyoto Dance Exchange

Taro KUSAYAMA

要約

本研究は、市川まや/Kyoto Dance Exchange (KDE) によるダンスワークショップ「ジゼル～そう遠くない未来、私はオムツを履くだろう」の実践を分析し、その意義を考察する。本ワークショップは、「大人のオムツ着用」という社会的タブーをダンスの身体表現を通じてポジティブに捉え直す試みである。市川氏は、『ジゼル』が持つ「受容」と「許し」のテーマと自身の介護職での経験を結びつけ、オムツを「羞恥の対象」ではなく「新たな身体性の象徴」として再解釈することを目指した。ワークショップでは、「履かせ合い」で他者との関係性を見直し、「モデル（ファッションショー）」ではオムツを堂々と見せることで社会の価値観に挑戦した。また、参加者や観客の語りから、ワークショップの影響が明らかになった。例えば、ダンサー A は当初「オムツを履いて踊ると台無し」と感じていたが、最終的に「美しく踊り、観客の突っ込みを誘う表現」へと変化した。また、2024年11月のパフォーマンスを観たダンサー B の母親は「じつは私も履いている」とカミングアウトし、ダンスが観客の意識にも変容をもたらす可能性を示した。本ワークショップの成果として、①オムツの視覚的強調による意味の転換、②他者との関係性の再構築、③ポジティブな身体感覚の醸成が挙げられる。今後は、参加者の変容プロセスや観客の語りをより広範に収集し、身体表現を通じた価値観の再解釈の可能性をさらに深く探る必要がある。

キーワード：ダンスワークショップ、大人のオムツ、受容、価値観の問い直し

1. はじめに



写真1 ワークショップおよびショーイングのチラシ

あるダンスのワークショップに参加した際、筆者は Kyoto Dance Exchange (KDE)⁽¹⁾の代表市川まや氏から一枚のチラシ(写真1)⁽²⁾を手渡された。そのチラシには、大人の男女1名ずつが紙パンツを履いた後ろ姿の写真が掲載されており、ワークショップおよびショーイングのタイトル「ジゼル」とともに、「そう遠くない未来、私はオムツを履くだろう」⁽³⁾、という言葉がサブタイトルとして記されていた。

このチラシには以下のメッセージが記されている。

「私たちは赤ちゃんのころ、／オムツが外れた日を親に祝福されました。／そして我々は再びオムツを履く日がやってくるのです。／それは人様には見せたくない姿として世間ではオムツを履く日に／ついては告白することはありません。わたしたちはそれを受け入れ、／その日に備えてたくましくかわいくお尻を振っておどってみたいと思います。／『ジゼル』は1941年にフランスで初演されたバレエ作品、アドルフ・アダン作曲。」⁽⁴⁾

このメッセージは、日常生活でタブー視されがちな「大人のオムツ着用」⁽⁵⁾というテーマをあえて前面に打ち出し、それをポジティブかつ力強く再解釈する意図を感じさせる。

近年、アートと福祉を架橋する試みが増えており、筆者も共生社会の構築を目指したソーシャルアート⁽⁶⁾として、茨木市文化振興財団と連携し、共生社会の実現を目指すコミュニティダン

ス⁽⁷⁾のワークショップ⁽⁸⁾の実施やダンス公演⁽⁹⁾の制作という実践に取り組んでいる。さらに、筆者自身がリタイア後の男性の生きがい創出を活動目的のひとつに掲げた「おやじダンスカンパニー」⁽¹⁰⁾の一員として、ダンスという身体表現をとおして社会課題にコミットしようとしていることもあり、この市川氏の取り組みは筆者にとって興味深いものとして映った。

市川氏のいう、大人がオムツを履き、それを隠すのではなく、「たくましくかわいく」強調しながら踊るという行為は、既存の社会規範に対する挑戦であり、筆者はこの取り組みを「現代社会のネガティブな価値観に対する問いかけ」として理解した。

そこで本稿では、市川氏によるワークショップの実践を分析し、この試みが持つ意味を考察する。具体的には、2023年10月15日（日）に開催されたダンスワークショップのプログラム内容に注目し、その場面を詳細に分析することで、このワークショップが「大人のオムツ着用」に対するネガティブな価値観をどのように問い返しているのか、またその成果がどのような形で見出されるのかを検討する。そして、ダンスという身体表現が身体的・社会的タブーにどのように向き合い、既存の価値観を問い直す可能性をどのように持ち得るのかを探ってみたい。

2. なぜ『ジゼル』なのか —市川氏へのインタビューから—

「ジゼル〜そう遠くない未来、わたしはオムツを履くだろう」という挑戦的なタイトルを掲げた市川氏のワークショップは、現代社会においてタブーとされがちな「大人のオムツ着用」をテーマに据え、それを新たな視点から捉え直そうとする試みである。このテーマを具現化するにあたり市川氏が選んだ作品が、クラシックバレエの名作『ジゼル』⁽¹¹⁾である。

『ジゼル』は、1841年にフランス・パリで初演されたロマンティック・バレエの代表作であり、アドルフ・アダンによる作曲、ジャン・コラーリとジュール・ペローによる振付によって創作された。物語は、純真な村娘ジゼルが貴族の青年アルプレヒトに騙され、悲しみのあまり命を落とすが、死後に精霊「ウイリ」となり、彼を救すという悲劇的な愛の物語である。本作の中心的テーマは「受容」と「許し」である。

では、なぜ、『ジゼル』だったのだろうか。そして、『ジゼル』と「オムツ」はどのようにして結びついたのだろうか。この章では、市川氏へのインタビュー⁽¹²⁾をとおして、この点についてみてみたい。

まず、市川氏と『ジゼル』との関係について、市川氏は以下のように述べている。

「大学時代に『ジゼル』を使った（ダンス）作品を大学4年生の時に作ったことがありました。その時は『受容する』っていうことがテーマでした。なぜ『ジゼル』を選んだのかというと、ただ本当にその『ジゼル』っていうクラシックバレエが好きだったっていうのがまずそもそもあるのですが、あのバレエ作品の内容自体は果てしなくひどい話なのです。人が

一人死んでいるわけですし。とくに女性の立場からしたら、ほんまに許せない作品なのです。私は、まだ大学生でしたので、いろんなことを受け入れるっていうのはとても難しいなあ、って感じていて。でも、それを一番表しているのが、やっぱり『ジゼル』なのかなって思ったのです。ジゼル自身がアルプレヒトのやったことに対して受け入れることだったり、アルプレヒトが失ったジゼル、もう二度と戻ってこないジゼルを受け入れることだったり、そういうのが一番象徴されている作品なのかなって。だからその『ジゼル』で卒業制作を作ろうと思いました。」

市川氏は大学時代、卒業制作としてクラシックバレエ『ジゼル』をテーマに作品を制作したが、そこには『ジゼル』への純粋な愛着が根本にあったという。その一方で、作品の悲劇的な内容や「受容」というテーマが市川氏自身の創作や価値観に深く影響を与えたようだ。当時大学生の市川氏にとって『ジゼル』という物語で展開されていたことがらを「受容」することは難しく、若者特有の葛藤の中で『ジゼル』が象徴的な存在として心に響いたという。『ジゼル』の登場人物たちは「失うこと」や「許し」に向き合い、主人公ジゼルはアルプレヒトの裏切りを受け入れ、彼が失ったジゼル自身を受け入れる過程を描いている。この「受容」をテーマにした物語に共感し、卒業制作として『ジゼル』を選んだ、とのことであった。

市川氏は次のように続けている。

「その作品は一度作られたものの、再演されることもなく終わりました。それを作ったのは、私が22、23歳くらいの時ですから、今から20年ほど前の話です。今の私が41歳なので、ずっと封印されたままになっています。ただ、その頃に「やっぱりジゼルという作品が好きだな」とか、「ジゼルの音楽が好きだな」と思うようになりました。」

では、その封印している『ジゼル』を「大人のオムツ着用」へのネガティブなまなざしへの問い返しに結びつけたのは何なのだろうか。市川氏は以下のように語っている。

「私は仕事柄、オムツに触れる機会がとても多かったです。医療や福祉系の仕事をしていれば、オムツを履かせることは身近で珍しいことではありません。でも、そういった仕事をしていない人にとっては、オムツに触れる機会は限られています。例えば、子供を産んだことがある人なら、最初にオムツに触れるのは赤ちゃんのオムツを履かせる場面です。その後を訪れるのが、親のオムツかもしれませぬ。

赤ちゃんの場合、親になるための講座などで、オムツを履かせる練習をすることもありません。でも、大人の場合、親がオムツを履くようになるための準備期間や練習はありません。親がいつの間にか自分で履き始めている場合もありますが、やがてそれができなくなり、子

供や配偶者に頼ることになる。そうした状況は突然訪れるのです。

また、親だけでなく、パートナーの介護が必要になったり、自分自身がオムツを履かなくてはならない状況が訪れることもあります。オムツに対するこうした現実、赤ちゃんのオムツが「成長の象徴」として肯定的に捉えられるのとは対照的に、大人のオムツには「退化」や「衰え」といったネガティブなイメージがつきまといまいます。」

この市川氏の語りには、医療や福祉系の仕事に従事する人々にとっては日常的な行為である一方、一般の人々にとっては限られた接点をとおしてしか経験されないなど、オムツに触れる経験が職業や生活環境により大きく異なることが示されている。この語りで重要なのは、赤ちゃんのオムツが「成長」の象徴として肯定的に捉えられるのに対し、大人のオムツは「退化」や「衰え」と結びつくネガティブなイメージを持たれていることが強調されている点である。

さらに、市川氏は、以下のように続けて語っている。

「私たちの作品『ジゼル』のサブタイトルは、「そう遠くない未来、私たちはオムツを履くだろう」です。これは、KDEのメンバーを見ながら感じることであります。今のKDEでは私より年下のメンバーが少なくなり、徐々にみんなの年齢が上がってきました。肩が痛いと言い始める人が出てくると、「ああ、四十肩かな、五十肩かな」と思ったり、順序よく年齢を重ねていくことを感じます。私自身も若い頃は想像もしていなかった身体の変化に直面しています。職場で転んだり、肉離れを起こしたりすることが増え、どうしても年齢を感じざるを得ません。その中で「オムツ」というものが、身体や排泄に関する象徴的な存在だと思うようになりました。

排泄はプライドに深く関わるものであり、それを受け入れることには個人差があります。すんなりと受け入れられる人もいれば、抵抗を感じる人もいます。しかし、オムツを履いていることを卑下することなく、「まあそんなもんだよね」と受け入れて生きたい。KDEの中では、そんな気持ちを作品にしていきたいと考えています。オムツを象徴的なアイテムとして、逞しく踊り続ける姿を描きたい。それが私たちの願望であり、テーマです。」

このように、市川氏にとって、KDEの活動やメンバーの身体の変化、自身の加齢の実感といった背景の中で、「オムツ」という存在が身体や排泄を象徴するテーマとして浮上した。排泄は「プライド」に深く関わる行為であり、それを受け入れることには個人差がある。しかし、市川氏は、「オムツを履くこと」を単なる衰退や羞恥として捉えるのではなく、「まあそんなもんだよね」と受け入れ、前向きに生きる姿勢を作品として表現したいと考えている。そして、市川氏はそのテーマを体現するものとして『ジゼル』を再び取り上げた。

その地点から始められたワークショップ「ジゼル」は、『ジゼル』が持つ「受容」の概念を、

オムツを履くという行為の再解釈に应用することで社会の価値観に挑戦し、異なる視点から「生きること」とは何かを問いかける試みとなっている。

このようにして、『ジゼル』と「オムツ」は、市川氏の創作において新たな意味をもって結びついたのである。

3. ダンスワークショップ「ジゼル～そう遠くない未来、私はオムツを履くだろう」の内容分析

前章では、市川氏の語りをとおして、クラシックバレエ『ジゼル』が内包する「受容」というテーマと、介護職での経験から見いだされた「オムツ」の象徴的な意味が深く結びついていることを明らかにした。

本章では、この背景を踏まえ、市川氏が企画・実践したダンスワークショップ「ジゼル～そう遠くない未来、私はオムツを履くだろう」では、具体的にどのようなプログラムが行われ、ダンサーたちにどのような経験がもたらされたのかを検討する。具体的には、2023年10月15日(日)13時から16時に京都芸術センター南館3階ワークショップルーム3で実施されたダンスワークショップ⁽¹³⁾の内容を分析し、その意味について考察する。

このダンスワークショップは、以下のような場面構成で進行した。

- ① 衣装選び
- ② 自己紹介
- ③ 趣旨説明
- ④ 紙パンツの配布および装着確認
- ⑤ 履かせ合い
- ⑥ 大きくなったり小さくなったり
- ⑦ 走馬灯
- ⑧ 起こし合い
- ⑨ モデル（ファッションショー）
- ⑩ かわいがり
- ⑪ ぎっこんぱったん
- ⑫ おしくらまんじゅう

3.1 衣装選び

ワークショップの開始前、市川氏は白色またはクリーム色など白に近い衣装を床に並べる。この衣装はその日のワークショップでダンサーたちが着用するものである。ダンサーたちは自分が着用したい衣装を選び始めるが、市川氏は衣装選びにあたって次のような視点を伝える。

「その衣装を着用した際にオムツがどう見えるのか、あるいは見せることができるのかを意識して」

その後、市川氏はダンサーたちが衣装を試着した際のオムツの見え方をひとりずつ丁寧にチェックする。この確認をとおしてその日のワークショップで着用する衣装が決められていく。

この場面の意味は以下の3点にあると考える。

1点目は、バレエ作品『ジゼル』との深い関連性である。『ジゼル』の第二幕では、亡霊ジゼルやウィリたちが白い衣装を身にまとい、死後の浄化や赦し、幽玄的な美しさを象徴している。この白色は、浄化や再生、そして肉体を超越した存在を示す重要な要素である。ワークショップにおいても、白の衣装を着用することで、社会的な偏見や固定観念にとらわれない新しい身体表現の可能性を象徴的に示すことができるであろう。

2点目は、オムツを強調する衣装選びである。衣装選びの過程では、市川氏が衣装を着用した際に「オムツ」がどのように見えるのか、また「オムツ」をどの程度見せることができるのかを確認していた。これは、一般的に隠されるべき対象とされる「オムツ」を視覚的に強調するという身体表現をとおして社会の価値観に挑む重要なステップとして位置付けられる。

3点目は、ダンサーの主体的な関与と一体感の形成である。最終的に、参加者それぞれが着用する衣装を決定したが、このプロセスは単なる準備に留まらない。ダンサーたちが主体的に衣装を選ぶことで、ワークショップのテーマに対する積極的な関与を促し、同時に参加者間の一体感を高める役割を果たすことになると思われる。

3.2 自己紹介

次に、自己紹介を行なった。市川氏から参加者に、「今回の取り組みに対する想い」を語ってほしいとのリクエストがあり、それに応じて参加者が「想い」を語っていた。ここでは、印象的な語りをみてみたい。

「まだ、早い方もおられますが、いまからオムツに馴染みましょう」(60代・男性・KDE)

「今回の催しはこれまでとは違って、オムツという、生きることに关するプライベートなことを人前でやるということで、私の中では興味津々。楽しみにしています。」(70代・男性・KDE)

「ちょっと前にチェリッシュ⁽¹⁴⁾が、紙オムツか尿漏れパッドの宣伝をしていたんです。チェリッシュって私たちと同年代。わたしもぼちぼちそうなるもおかしくない年代。これ(この取り組み)で、価値観変わるなって思いました。私は、いまのところはまだ使用していませんが。」(70代・女性・KDE)

「自分が稽古の時にオムツを履いてみること自体はたいして抵抗はなかったのですが、(自分

が) オムツを履いて踊っている動画を見て、オムツ履いたら、せっかくカッコよくキレイに踊っても台無しやんと思ってガッカリと、ちょっと思ってしまいました。これからどうなるか、楽しみかつ不安だなと思います。」(50代・女性・KDE)

「オムツは何度か使用していますが、人前でやるのは初めてです。」(70代・男性・KDE)

「まだオムツをつけたことがないと言いたいのですが、じつは、産後に尿漏れがひどくてつけていた時期がありました。今回、ひさしぶりにオムツを履くということで、カッコよく履きこなしたいです。」(60代・女性・KDE)

「オムツを履いたことがない、と思っていたのですが、今年(2023年)5月に背中を手術した時に一度だけ履きました。それで踊ることは変わったことではないと思っていたけど、よく考えたら、(オムツを履いて踊ることは)衝撃的だなあと感じています。」(女性・外部参加者)

「今回、オムツがテーマになっているというのですが、普段、オムツって見せない、隠そう隠そうとしているはずのものなのに、それを舞台で見せるというところに興味を持って参加しました。」(40代・女性・外部参加者)

以上が、今回のワークショップ参加者の自己紹介の一部である。

この場面の意味は、以下の3点にあると思われる。

1点目は、オムツに対する多様な価値観と経験の共有である。

自己紹介では、参加者が「オムツ」という題材に対してさまざまな価値観や個人的な経験を語る場面が見られた。とくに、以下の2つの観点が浮かび上がる。

一つめの観点は、「オムツ」を履く経験の個別性である。参加者の中には、「産後の尿漏れ」「手術後」「介護経験」など、これまでにオムツを使用した経験がある人もおり、それが今回のテーマへの感情的な結びつきを生んでいる。一方で、「まだ使用していない」という人も、将来的に訪れるであろうこの体験に対する想像力を働かせながら参加していることがうかがえる。

二つめの観点は、「大人のオムツ着用」への社会の価値観への挑戦である。「普段は隠すべきもの」として扱われるオムツをあえて舞台で見せるという発想に、参加者は「衝撃」「興味」を抱きつつも、「価値観を変える可能性」を感じている。

2点目の意味は、羞恥心と自己肯定の2つの側面である。自己紹介での発言の中には、「オムツを履いて踊る動画を見て失望した」というように、オムツを履くことがダンスの美的価値を損なうと感じるコメントがある一方で、「カッコよく履きこなしたい」という前向きなコメントも見られる。これらのコメントから、社会的規範としての「オムツ=恥」という価値観がまだまだ根強いことを示していると同時に、その価値観を問い返そうとする積極性もうかがうことができる。これが、ワークショップのプロセスそのものに反映され、参加者が「受容」をテーマとして自己の身体や感覚と向き合う契機を提供しているといえるのではないだろうか。

3点目の意味は、共同体としての意識形成である。参加者が自分の経験や価値観を語るプロセスは、ワークショップのテーマである「受容」を共有する共同体としての意識を醸成する重要なステップであるといえる。自己紹介をとおして、参加者間で「オムツ」という題材に対する共感や興味が共有され、それが全体の一体感を形成することにつながる。

3.3 趣旨説明

自己紹介に続けて、市川氏は本ワークショップで扱うバレエ作品『ジゼル』への個人的な想いや今回の取り組みの趣旨を語った。以下はその概要である。

市川氏は大学学部生時代から『ジゼル』のストーリーに深い関心を寄せ、そこから「受容」というテーマを見出し、卒業制作としてダンス作品の制作および上演に取り組んだ経験を持つ。しかし、当時の作品には満足できておらず、その後も『ジゼル』をさまざまな社会問題と関連付けてアレンジする作品を観る中で、「受容」というテーマで再び『ジゼル』を取り上げ、作品を創りたいという想いを抱いてきた。

介護職として働く中で、市川氏は紙オムツを日常的に扱うようになり、これを「受容」というテーマに関連付けて考えるようになった。また、自身が2008年に設立したダンスカンパニーKDEでは、若い世代ではなく、主に高齢層のメンバーが定着する状況を目の当たりにしてきた。そうした背景から、メンバーが加齢に伴い介護を受ける側や紙オムツを必要とする年代に近づいている現実を踏まえ、「介護に直面する前にオムツに慣れる予備段階」として、前向きにオムツを受け入れる試みを創造したいと考えるようになった。

さらに、市川氏は「オムツを履く」という行為を恥や屈辱ではなく、自らの個性として堂々と表現できる環境を目指していると語る。自身の中で未解決のまま残っていた『ジゼル』への想いと、介護職をとおして得た紙オムツという題材が結びつき、「受容」をテーマとした今回の取り組みが生まれた。

この市川氏の趣旨説明の意味は、以下の3点にあると考える。

1点目は、「受容」というテーマの意義の提示である。市川氏は学生時代から『ジゼル』に深い関心を抱き、そこから「受容」というテーマを抽出してきた。この趣旨説明では、市川氏がそのテーマに再び取り組む背景が明確に語られている。この説明により、ダンサーはこのワークショップが単なる身体表現の場ではなく、深い社会的・心理的テーマを内包した取り組みであることを理解する。

2点目は、「紙オムツ」という具体的モチーフの選択理由の提示である。市川氏の介護職での経験から、「紙オムツ」というモチーフが「受容」というテーマと結びつき、ワークショップの具体的な題材として選ばれたことが説明されている。このモチーフは、介護や加齢という現実には直面する参加者にとって身近であると同時に、社会的にタブー視されがちなテーマでもある。これにより、ワークショップの内容が現実的かつ挑戦的なものとなることが示されている。

3点目は、参加者の意識形成と価値観の転換を促す役割である。市川氏が「オムツを履く」ことを「恥や屈辱ではなく、自らの個性として堂々と表現する行為」として位置づけたことにより、このワークショップは「ネガティブな社会の価値観」を問い直す試みとして社会的意義を持つことが説明されている。この趣旨説明により、参加者に「オムツ」という象徴的アイテムを持つ意味が明確に伝えられ、従来の価値観の再評価と身体的・精神的な解放を目指すという目的が共有される。

3.4 紙パンツの配布および装着

その後、市川氏は車座に座る参加者に紙パンツの袋を持参し、サイズや機能について説明を行った。説明後に紙パンツが配布され、参加者各自がその内側にマジックで名前を書き、現在着用している衣装の上から紙パンツを履いた。なお、KDEのメンバーの中には既に独自の紙パンツを所有している者もいたが、今回は全員が同じ形式で装着を行った。

この場面の意味は、次の2点にあると考える。

1点目は、紙パンツを装着する行為の象徴性である。紙パンツの装着は、このワークショップにおいて象徴的な意味を持つ重要な行為である。紙パンツは社会的には「隠すべきもの」や「羞恥の対象」として捉えられることが多いが、ここではそれを堂々と装着し、身体表現の一部として肯定的に捉えることが意図されている。紙パンツを全員が一様に装着することで、参加者は「他者と同じ状況である」という共有感を得ると同時に、紙パンツに対する固定観念を捨て、新しい視点を探る機会を得ることができる。

2点目は、名前を書くプロセスの意義である。紙パンツに名前を書く行為は、参加者それぞれが装着する紙パンツを自分自身のもので主体的に受け入れることを促す。この行為は、紙パンツが単なる物理的な道具ではなく、自分自身の身体の一部として認識されることを助けるものである。また、名前を書くことで「他者と共有するものの中の個人性」を示すことができ、参加者の一体感と個々の独立性が両立している。

3.5 履かせ合い



写真2 履かせ合い

各参加者が、自身の紙パンツを衣装の上から履けることを確認した後、市川氏は「それでは、人に履かせてもらいましょう」と指示を出し、続けて以下の説明を行った。

「これは、介護用の寝たきりの状態で使う紙オムツではありません。ある程度、自力でパンツを履くことのできる人が使う紙パンツです。ちなみに、最近、福祉の現場では、紙オムツというのではなく、利用者に使ってもらう時には肌着というときもあり、あくまでもパンツとして取り扱っています。」

市川氏は、「紙オムツ」が福祉現場では「肌着」や「パンツ」として扱われることを強調し、その呼称が利用者のプライドや尊厳を守る意図を持つことを説明した。さらに、参加者を2人組のペアに分け、「履かせ合い」の方法を解説した。

「この紙パンツですが、履かせてもらう時には少し足を広げて、手伝ってくれる人の肩に手を置くか、あるいは、近くに壁などがあればそこに手をつき、履かせてもらってください。くれぐれもセクハラにならないように。」

説明後、各ペアが交互に「履かせ合い」を実践した。

このワーク終了後、市川氏は筆記具と付箋を配布し、「履いた／履かせてもらった」経験について感想を書き出し、壁に掲示して相互に読み合う時間を設けた。

以下が参加者の感想である。

・ポジティブな感想

「気持ちよかった。」

「フィット感が心地よい。」

「あったかい。」

・ネガティブな感想

「足の付根あたりに違和感を感じる。スキじゃない。」

「自分がはくのはいいけど、人にはかせてもらうのは居心地悪いなあ。」

・社会的、象徴的な感想

「紙パンツを履くようになって生きていてほしい。」

「何か足りない人になったみたい。」

この場面の意味は、次の4点にあると考える。

まず、1点目は、「履かせ合い」の象徴的意義である。この「履かせ合い」という行為は、単に身体的な行動を共有するだけでなく、次の2つの重要なテーマを内包している。

一つは、身体的依存と他者との関係性というテーマである。他者に紙パンツを履かせてもらうことは、身体的な依存を伴う行為であり、介護現場での具体的な場面を想起させる。

もう一つは、羞恥心と受容というテーマである。自分で紙パンツを履く行為には抵抗が少なくても、他者に履かせてもらうという行為は多くの参加者にとって「居心地の悪さ」を伴う。この感覚は、身体の一部が他者に触れられることや、自立が損なわれることへの心理的抵抗を示しているだろう。

2点目は、「福祉の現場の知見を活かした身体体験」である。市川氏が説明したように、福祉現場では「紙オムツ」ではなく「肌着」や「パンツ」として扱われる。この呼称の変化は、利用者の尊厳を守るための配慮である。市川氏は「履かせ合い」の場面でこの知見を共有することで、参加者に身体的依存を「恥」ではなく自然な現実として捉える契機を提供している。

3点目は、「感想の多様性と社会的規範への挑戦」である。まず、「気持ちよかった」「フィット感が心地よい」などのポジティブな感想は、紙パンツを履く行為が身体的な快適さを伴うものであることを示している。このような感覚は、通常の羞恥心や抵抗感を乗り越えるきっかけとなる。一方で、「違和感を感じる」「人に履かせてもらうのは居心地悪い」などの身体感覚の不快さや心理的抵抗を表明する感想は、紙パンツが身体に与える制約や心理的影響を表している。「紙パンツを履くようになって生きていてほしい」などの社会的象徴的な感想は、紙パンツを単なる機能的な道具としてではなく、加齢や依存を受け入れつつ生きる姿勢の象徴として捉える視点を示している。

4点目は「共同体としての意識の醸成」である。「履かせ合い」をペアで行い、その感想を共

有するプロセスは、個々の体験を超えて共同体としての意識を醸成する役割を果たしていると言えるであろう。

3.6 大きくなったり小さくなったり



写真3 大きくなったり小さくなったり

その後、市川氏は、紙パンツを履いたままフロアに寝転がるよう伝え、次のように指示を出した。

「気楽に、体重を床に預ける感じで。呼吸をゆっくり整えてみます。」

「呼吸が落ち着いたら、赤ちゃんみたいな格好になってもらえますか。ちっちゃい、お腹の中にいるような。」

市川氏の言葉とともに音楽が流れ、ダンサーたちは背中、膝、肘を曲げて丸くなった。

「その赤ちゃんの格好を、もう少しギューッとコンパクトに、窮屈にしてみてください。腹筋とか使うかもしれませんが、ギューって。そうそう。」

「そこから、一度、力を抜いてください。」

「すごく時間をかけながら、ゆっくりあくびをするような感じで伸びをしてみましょう。」

ダンサーたちは仰向けに「大」の字になり、市川氏は続ける。

「今、小さくなったところから大きくなる動きを、何回か繰り返してください。ゆっくり、自分が気持ちよく大きくなったり小さくなったりする感じで。」

この動きに「オムツ」の感触を意識させる。

「オムツってあったかい感じがしませんか。その、ホカホカというのを感じながら、守られているような気がしませんか。」

また、他者との接触にも意識を向けるように伝える。

「誰かと触れ合うことがあれば、その刺激をそのまま受けて次の動きにつなげてみてください。」

その後、ペアでの動きを指示し、互いの大きくなる・小さくなる動きを逆にする事で、ダンサー同士の相互作用を促す。

「どちらが主導権を握るというのもなく、ただ一緒に動き続けます。」

最後に、ダンサーたちは立ち上がり、日常のスピードで歩き始め、徐々にスピードを上げる。

「視野を広く持ち、他者が存在していることを意識してください。」

この動きによって場にはさらに躍動感が生まれ、空間全体が膨張したように感じられた。

この場面の意味は、以下の4点にあると考える。

1点目は、身体の変容と成長のプロセスである。この場面では、「赤ちゃんのように小さくなる動き」と「伸びをすることで大きくなる動き」を繰り返すことで、身体の縮小と拡張を象徴的に表現している。小さくなる動きは赤ちゃんのような無防備で守られた状態を再現し、大きくなる動きは成長や開放を象徴する。このプロセスは、人生における身体的変化や成長のプロセスを身体感覚として追体験する試みである。

2点目は、オムツの感触を通じた身体を受容である。

「オムツってあったかい感じがしませんか」という市川氏の言葉は、紙パンツが赤ちゃんとしての守られる感覚を呼び起こし、身体的な安心感を提供することを意識させている。一般的に羞恥や衰退と結び付けられがちなオムツを、「温かさ」や「保護」といったポジティブな感覚と関連付けることで、身体に対するネガティブな価値観を転換する効果を持つ。これにより、参加者は自らの身体を新しい視点で受け入れる準備を整えることができる。

3点目は、他者との触れ合いと相互作用である。市川氏が「誰かと触れ合うことがあれば、その刺激をそのまま受けて次の動きにつなげて」と指示した点は、他者との接触が持つ創造的な可能性を強調している。このプロセスでは、偶然の接触がダンサー同士の相互作用を生み出し、個々の動きが自然に調和していく。さらに、ペアでの動きにおいて「どちらが主導権を握るとい

うのものなく」と述べられている点は、主従関係を排除した対等な関係性の探求を表している。これは、介護や身体的ケアにおける協働の在り方を示唆する要素とも理解することができる。

4 点目は、空間の膨張と社会的広がりへの暗示である。場面の最後で、ダンサーたちが徐々に立ち上がり、日常のスピードから歩く速度を上げていく動きは、個々の身体が空間と一体化し、拡張していく感覚を象徴している。「視野を広く持ち、他者が存在していることを意識してください」という指示は、個人の身体が他者や社会との関係性を意識しながら広がっていくことを暗示している。この段階で場に生じた躍動感や空間の膨張感は、身体的自由や解放感の象徴と捉えられる。

3.7 走馬灯

次に、市川氏は、ダンサーに「走馬灯」をテーマにした動きを提案する。

「そうしたら、歩きながら考えましょう。人生の走馬灯です。今日やってきた、今朝からの様子でもいいですし、ここ最近の私のルーティンでもよいので、思い出しながら歩きます。今日は何をしてきたかな、とか。今月こんなことしたなあ、とか。ということ、思い出しながら歩きます。」

この言葉を受け、ダンサーたちの歩くスピードは全体的に落ち始める。

続いて、市川氏は具体的な動きの指示を与える。

「それでは、それをピックアップしてください。いくつか。朝の様子はこの部分だけ、とか。わたしのよくやること3つ、とかでもいいです。なにか自分のルーティンとか、心の中にと思い浮かぶことをピックアップして、それを早回しでやってみます。」

「わたしはいつもこれをしている、でもいいですし。私は、今日これをした、でもいいですし。」

この言葉に応じて、ダンサーたちは自分が思い浮かべたことを体で表現しながら歩き始める。歩きながら表現を続ける者もいれば、立ち止まったり、うずくまったりする者も現れる。

市川氏はさらに具体的な指示を追加する。

「自分の家から駅までのことを思い出してもらってもいいですし。それをなるべく、歩きながら、早回しでやります。」

「止まってしまうずに、歩きながら、人と人との間をすり抜けながら、早回しでやります。」

「絶対にぶつかりません。」

「歩きながらです。歩き続けなければなりません。」

「何回か繰り返してください。同じことでいいです。その動きがからだに染み込むまで、歩き続けましょう。」

「視野が狭くならないように。」

動きの強度をさらに高めるよう促す。

「はい、もっとスピードアップ（10回繰り返し）。ぶつからずに。いやになるまで続けてください。」

疲労が溜まる中、最後の指示が出される。

「では、もうイヤになった人から寝てみてください。疲れた人からやめてください。」

この場面の意味は、次の5点にあると考える。

1点目は、記憶と身体結びつきである。市川氏が「人生の走馬灯」を提案したことで、参加者は自分の記憶を身体で表現するプロセスに導かれる。この動きは、日常の経験や思考を体感的に再現し、身体をとおして内面的なプロセスを外化する試みである。

2点目は、身体のルーティンと意識化である。「早回しで」「歩きながら」などの指示は、記憶の中のルーティンを意識的に身体化し、参加者がその動作を反復することで、新たな視点から日常を捉える機会を提供している。反復を強調することで、動きが「体に染み込む」感覚が促進されている。

3点目は、集団の中での個の表現である。市川氏の指示が「ぶつからない」「人の間をすり抜ける」という点を強調していることから、集団の中で他者を意識しながらも、自分自身の記憶を表現するというバランスが重要視されている。この動きは、個人の存在が他者と共存し、相互作用の中で意味を持つという関係性を象徴している。

4点目は、身体の限界と解放である。「いやになるまで続けて」「疲れた人からやめてください」という指示により、参加者が身体的限界に到達し、それを解放するプロセスが組み込まれている。この解放感は、日常のルーティンや社会的規範から解放される感覚を体験させることを意図しているものととらえることができる。

5点目は、時間と記憶の象徴性である。「走馬灯」というテーマを身体化することで、時間の流れや記憶の重なりが身体で再現される。このワークは、個人が人生や日常を振り返り、それを新たに再構築する場を提供している。

このように、このワークは、身体をとおして記憶と日常を再体験し、他者との共存や身体の解

放を意識化するワークとして機能している。このような取り組みは、身体表現を通じた時間と記憶の再構築というテーマを効果的に具現化していると言えるであろう。

3.8 起こし合い



写真4 起こし合い①



写真5 起こし合い②

市川氏は、ダンサー1人を仰向けに寝かせ、「起こし合い」というワークを次のように説明する。

「介護とは思わずに、ただ、この寝ている人をどうやったら起こすことができるのか考えます。（仰向けに寝て手を頭上に伸ばしているダンサーの両膝を立て、両手を両手で引っ張り上げて起こしながら）こうやったら起きるかもしれませんし、（ダンサーをもう一度寝かして、両膝を立て、両手を胸に置き、横に転がして左腕で背中を抱き抱えるようにして起こしながら）こうした方がいいのかなとか悩むのですが、いろいろやり方があると思うのです。ここでは、介護の勉強をするのではなく、ダンス的に、目の前の人を起こすにはどうすれば良いのかを考えてください。起こす人と起こされる人の体型、筋力などによっていろんな起こし方があります。そのどれが正しいとかではないです。おたがいに、よりよい起こし方があるかもしれない。それを、ペアでお互いに話し合いながら実験してみてください。」

この説明を受け、ペアとなったダンサーたちは交互に起こし合いを始め、感想を述べ合いながらさまざまな方法を試していく。市川氏はさらに次のように語る。

「他の人とペアになるとまた違ってきます。ひとつの方法だけだと、相手が変わったらそれが通用しないことがあるので、同じペアでも、2つくらいの方法を考えておいた方がいいと思います。」

「ここにいるメンバーはまったくの寝たきりの状態ではないので、起こされるときに、相手

が起こしにくそうだったらちょっとだけ腹筋を使ってあげる、というのはやってもらっていいかもしれません。本来の介護場面ではそういうわけには行きませんが、ここでは介護の勉強をしているわけではないので。ダンスの振り付けとして、この人を起こす手順として、という感じでやってみてください。」

また、起こし合いの流れを拡張する指示も行う

「いまはペアで起こし合いをやってもらいましたが、今後は、ペアではない人ともやってもらうことになるということを伝えておきます。あと、またあとでやるんですが、起こされるんだけど、起きたくなかったら、起きなくてもいいです。起こされたけど、『まだ起きられへん』と感じたらまた寝て、他に人に起こされて、『仕方ないな、起きよか』でもいいです。ずっと寝てもらってもいいのですが、そうすると、先に起こす側になった人が寝ることができないので。起こされて、『あ、いける』と思ったら起きてあげてください。これまで何度か KDE の中で試したのですが、けっこうみんな起きたがらない傾向があるので。」

この場面の意味は、以下の4点にあると考える。

1点目は、身体の多様性への理解である。起こす側と起こされる側がペアとなり、相互に体験することで、身体の高さや筋力、柔軟性の違いに対する理解が深まる。「どれが正しいとかではない」という市川氏の言葉は、身体の高さを受け入れる態度を象徴している。

2点目は、協働性と相互作用の探求である。ペアごとの試行錯誤をとおして、「心地よい」動きを見つけるプロセスは、協働性を体験的に学ぶ場となっている。この相互作用は、介護や他者との関わり合いにおける「強制」ではなく、「対話的な支え合い」を示唆する。

3点目は、ダンスの振り付けとしての再構築である。このワークでは、起こす動作そのものが「ダンスの振り付け」として捉え直されている。安全性と美しさを考慮した動きは、身体の実現や観客への提示としての価値を生む。

4点目は、個人の意志の尊重である。「起きたくなければ起きなくてもいい」「仕方ないな、と起きる」という選択肢を提示することで、個人の身体的自由や意志が尊重されている。これにより、動きが他者からの指示に基づくものではなく、内発的な動機によるものであることが強調されている。

3.9 モデル（ファッションショー）



写真6 モデル（ファッションショー）

10名のダンサーが横一列に並び、市川氏から次のような指示が出される。

「そのまま前に歩いてきてください。客席の前で止まったら、ファッションモデルのように、オムツを強調して3ポーズ取ってもらいます。しっかりお尻を見せて歩く。今回のメインはこのパンツ。このパンツありきのポーズを取ってください。これを3往復繰り返しやってもらいます。」

1回目と2回目は全員が揃って歩くが、3回目では別の指示が出される。

「1回目、2回目はみんなで揃って前に歩いてきてもらいますが、3回目はそれぞれのペースで歩いてきてください。」

このワークでは、ダンサーたちが「オムツ」を堂々と見せながらモデルのように歩き、ポーズを取る動きを繰り返すことで、オムツを象徴的かつ肯定的に表現することが求められる。

このワークの意味は、次の4点にあると考える。

1点目は、「オムツ」の肯定的な再解釈である。「オムツ」を強調し、堂々と歩き、ポーズを取ることとおして、社会的にネガティブなイメージを持たれがちな「オムツ」をカッコいいものとして再解釈している。この動きは、羞恥心や偏見を乗り越え、身体の変化や老いを肯定的に受け入れる姿勢を象徴している。

2点目は、個性と集団性の両立である。1回目と2回目では全員が揃って動きを行うことで、集団としての一体感が強調される。一方、3回目では「それぞれのペース」で歩く指示が与えられることで、個々の個性や表現が重視される。この構成は、個人と集団が共存する関係性を身体

表現をとおして具現化しているといえるだろう。

3点目は、「身体を見せる」ことの再構築である。モデルのように「オムツを強調して」歩き、ポーズを取る動きは、通常隠されることの多い身体の一部をあえて見せる行為である。これにより、「オムツ」が身体の一部として再認識されるとともに、老いや介護に関わる身体的現実がポジティブなものとして提示されている。

4点目は、集団から個人へ、そして自由への移行である。3回目の「それぞれのペースで」という指示は、集団の中で一律に行動する枠組みから自由に動く個人へと移行するプロセスを示している。これは、市川氏の、個々の表現を尊重し、多様な身体や個性を肯定するワークの意図を反映しているものである。

3.10 かわいがり



写真7 かわいがり

市川氏は床にあぐらをかいて座り、その足の間にダンサーが腰を下ろす。ダンサーの胸は市川氏の胸と垂直になる位置にあり、膝を立てた状態だ。市川氏はそのダンサーを抱き抱えるように、背中から首の下と膝の下に腕を回し、優しく揺さぶる。この動きが「かわいがり」である。ペアとなったダンサーたちは、交互にこの動きを行う。

市川氏は、この「かわいがり」という動きについて次のように述べている。

「この動きは、『赤ちゃんをあやすようにあるいはゆりかごで揺られているように、抱き抱えたい』という思いを持ち、それをこのダンスに入れてみたいと思ったためです。赤ちゃんであれば立って抱き抱えて揺らすことができますが、大人と大人であれば物理的にそれは無理だろう。では、誰もがおよそできる形はどのようなものかと考えたところ、座りながらであれば可能なのではと考えました。そして、この形を試してみようと思いました。」

さらに市川氏は、この動きがもつ意義について次のように語る

「想像だけではわかりにくかったのですが、実際にそれを KDE の稽古で実践してみると、それはとても美しい姿でした。まさに人が人をやさしく眼差しながら慈しんでいるかたちだと感じました。わたしたちは、大人になってからこのように人と向き合う時間を持っているのでしょうか。『生きているだけで愛おしい』と感じることは、時間がなければ味わうことができないのではないか。この取り組みは、そのようなことを味わう時間にしたいと考え、このパートをつくりました。」

このワークの意味は、次の5点にあると考える。

1点目は、他者との身体的な「慈しみ」の再体験である。このワークは、赤ちゃんを抱きしめ、あやす動作を大人同士で再現することで、身体的な接触を通じた「慈しみ」を体験する試みである。大人になるにつれ失われがちな、他者と向き合い無条件に慈しむ感覚を、身体表現として取り戻すことを目指している。

2点目は、「触れること」の持つ癒しと美しさである。市川氏が「とても美しい姿」と表現しているように、この動きは単なる身体的行為を超え、視覚的にも情感的にも深い美しさを伴っている。他者を優しく揺らしながら支える姿勢は、見る者にも触れる者にも癒しをもたらすものである。

3点目は、時間を共有することの意義である。市川氏が「生きているだけで愛おしい」と感じるためには「時間が必要」と述べているように、このワークは参加者が相手と時間を共有し、身体をとおして他者を受け入れるプロセスそのものに焦点を当てている。これにより、ふだん意識されにくい「他者との時間の共有」が身体感覚として表現される。

4点目は、身体を通じたコミュニケーションの復権である。「かわいがり」という動きは、言葉に頼らず身体をとおして行うコミュニケーションである。この動作をとおして、参加者は言語を超えた深い理解と感情の共有を体験し、人間関係の新しい可能性を見出す。

5点目は、大人同士での触れ合いが生む問いかけである。大人同士がこのように触れ合う機会は、日常的にはほとんどない。この動きは、日常から離れた場で人間関係を再構築し、身体的接触に伴う感情の再発見を促すワークとして機能している。

3.11 ぎっこんばったん



写真8 ぎっこんばったん

市川氏の指示により、ダンサーたちはペアになり、次の動きを試みる。

「床に腰を下ろし、背中と背中をくっつけ、横に動くときには、腕と腕もくっつけて動いてみる。前後（縦）に動く場合は、手を挙げた状態で。」

この動きは、各ペアが比較的スムーズに行えており、安定感が見られる。そこで、市川氏は次の指示を出す。

「では、ペアでパターンをつくってください。前後や横の動きしかしたくないというペアがあってもいいし、前後1回の後に横2回するのをワンセットにしてもいいです。また前後の動きから横に移るときに、斜めにうごいてもいいです。」

さらにペアを変えて同じ動きを繰り返す。ペアが変わっても安定した動きが続き、ダンサーたちはリラックスした様子で動きを楽しんでいる。

「気持ちいいなあ」と思わず声を漏らすダンサーも見られた。

このワークの意味は以下の5点にあると考える。

1点目は、他者との身体的な調和の探求である。このワークは、背中や腕などの身体的接触をとおして、ペアとの調和を体験することを目的としている。ペアごとに異なる体型や動きの癖を持つ中で、互いに適応しながら安定した動きを見つけるプロセスは、身体的なコミュニケーションの重要性を強調している。

2点目は、自由な動きのパターン化である。「パターンをつくる」という指示は、動きに創造

性を取り入れる機会を提供している。ペアごとの個性に応じて動きをカスタマイズすることで、単なる反復作業ではなく、自由で多様な身体表現が可能になる。この自由度が、動きの「気持ちよさ」を生み出しているものと思われる。

3点目は、ペアの入れ替えによる身体感覚の再発見である。ペアを変えることで、異なる身体や動きの特徴に適応する力が試される。この過程をとおして、個々のダンサーは自分の身体感覚を見直すとともに、他者との新しい協働の可能性を発見することになる。

4点目は、リラックスと身体感覚の肯定である。「気持ちいいなあ」と声漏れる場面は、このワークが身体に対して心地よさを提供していることを象徴している。身体的接触が緊張や負担ではなく、むしろリラックスを促進するものとして機能している点が重要である。

5点目は、非言語的な協働の促進である。このワークでは、言葉を介さずに身体的接触を通じた非言語的な協働が強調されている。背中や腕をとおして感覚を共有し、動きに合わせるプロセスは、相手の意図を「感じ取る」能力を養うものである。

3.12 おしくらまんじゅう



写真9 おしくらまんじゅう①



写真10 おしくらまんじゅう②

最後は、「おしくらまんじゅう」というワークである。

ダンサーたちはスキップをしながら舞台を動き回る。市川氏の合図で、全員が次第に円を描くように集まり始め、最終的にダンサーたちは円の内側にお尻を向けて立つ。お尻を合わせた後、「お尻で弾き合うように」一斉に飛び散り、各方向へ弾けていく。

このパートについて、市川氏は次のように語る。

「私は、チラシにも記したように、ジゼルを作ろうとした時、みんなでお尻を振って遅く生きていきたい、踊っていきたい、ということをしていました。そこで、最後は、お尻を『振る』というところまではいかなかったのですが、みんなでお尻をぶつけ合って弾ける

というシーンで、このワークを締めたいと考えてこのパートを作りました。』

さらに、市川氏はこのエンディングの意図についてこう述べている。

「みんなで呼吸を揃えながら集まり、お尻を合わせることで喜びを感じ合う。そして、これからも私たちはこうして踊っていくということを、堂々と表現できるようなエンディングにしました。それは、歩きながらエンディングを迎えるというかたちです。私たちがこのダンスで表現したことは、これからもまだまだ続いていく、という私たちの意思を表現したつもりです。」

この場面の意味は、以下の5点にあると考える。

1点目は、お尻を象徴とした「逞しさ」と「喜び」の表現である。このパートでは、「お尻」という身体の部位を中心に据えることで、参加者が「逞しく生きていきたい、踊っていきたい」というテーマを身体的に具現化している。お尻を合わせて弾き合う動作は、身体を通じた相互作用を象徴し、日常ではタブー視される身体の部分を大胆に使うことで、羞恥心や偏見を乗り越えた喜びと解放感を共有する場となっている。

2点目は、集団の一体感と弾けるエネルギーである。スキップで動き回りながら集まり、円を描いてお尻を合わせる動作は、呼吸を揃えながら形成される一体感を強調している。その後、お尻で弾き合って各方向へ飛び散る動きは、エネルギーの解放を象徴し、個々のダンサーが新たなステージへ向かうような未来への可能性を感じさせる。

3点目は、ワークの継続性と未来への意思表示である。市川氏が述べた「これからも私たちはこうして踊っていく」という言葉に象徴されるように、このエンディングは単なる終了ではなく、ダンスがこれからも続いていくプロセスの一部として捉えられている。歩きながら迎えるラストは、未来への意思と共に、このダンスが日常や人生と繋がっていることを暗示している。

4点目は、コミュニティと個人の調和である。円を作り一体化する動きから、それぞれが弾き飛ばされる動きへと移行する構成は、集団の調和と個々の独自性の両方を尊重している。この過程は、個人が集団の中で自立しつつ共存していくという社会的なメッセージをも含んでいるものと理解できる。

5点目は、解放と新たな始まりの象徴である。お尻を使った大胆な表現や、弾き飛ばされる動作は、参加者が自らを解放し、新しい始まりへと向かう象徴的な行為である。この場面は、身体的な自由と楽しさを共有し、観客にもそのエネルギーを伝えることを目的としている。

4. 本研究の示唆と今後の課題

本研究では、ダンスワークショップ「ジゼル～そう遠くない未来、私はオムツを履くだろう」の実践を分析し、その意義と課題を考察してきた。本章では、ワークショップの成果を整理するとともに、参加者や観客の語りを通じて見えてきた新たな視点を提示し、今後の課題について述べる。

4.1 ワークショップの成果とその意義

本ワークショップは、「大人のオムツ着用」という社会的にタブー視されがちなテーマを扱いながら、オムツを単なる介護用品ではなく、新たな身体性の象徴として捉え直す試みであった。その成果として、いくつかの重要な点が挙げられる。

1 点目は、オムツの視覚的強調とその意味の転換である。「衣装選び」や「モデル（ファッションショー）」の場面では、オムツを隠すのではなく、むしろ見せることを意識した演出が行われた。これにより、オムツが「羞恥の対象」ではなく、新たな美的価値や個性的な表現の一部として認識される可能性が示唆された。

2 点目は、他者との関係性の再構築である。「履かせ合い」や「かわいがり」のシーンでは、オムツの装着が、羞恥心を超えた他者との触れ合いやケアの実践として捉え直された。これにより、オムツは単なる排泄補助具ではなく、人間関係の構築や相互作用を促す媒体として機能し得ることが明らかになった。

3 点目は、ポジティブな身体感覚の醸成である。参加者の中には、オムツの着用が「守られる感覚」や「暖かさ」といったポジティブな身体感覚と結びついた例が見られた。こうした変化は、オムツを「退化の象徴」ではなく、人間のライフサイクルの一部として肯定的に受け入れる契機となる可能性を示唆している。

これらの点から、ワークショップは単なる舞台芸術の創作過程としての意義を超え、社会の価値観を問い直し、身体の在り方に対する新たな視点を提示する実践であることが分かる。

4.2 参加者の語りが見出す変容

本ワークショップの意義を考える上で、参加したダンサーの語りは非常に示唆的である。

とくに、2024年11月12日に京都芸術センターで開催されたパフォーマンスに出演したダンサー A さんの語りには、ワークショップを通じた価値観の変容が明確に表れている。A さんは、パフォーマンス後に筆者へ以下のような感想を寄せた。

「最初、どんなにきれいにカッコよく踊っても、オムツ履いてたら台無しやんて思ってまし

た。でも稽古を進める中で、オムツを履く意味を、私だけでなくメンバーがそれぞれ自分の中に見出して、それを身体に徐々に染み込ませていって、今日の作品があったなと思います。そして今日、オムツを履いて踊ることに対して、違和感や恥ずかしさが全くなくなっている自分に気づきました。

いつも中に入って（みんなといっしょに）踊っているので客観的にどうかもうひとつ分からないのですが、昨日のリハーサルを（外から）見て、これは素晴らしい作品だなと感じました。

今は、オムツ履いたら台無しじゃなくて、めっちゃ美しくカッコよく踊って、見てる人に「いやでもあんたオムツやん👏」って突っ込んでもらえるのが良いと思っています。」

Aさんの語りは、オムツの持つネガティブな意味がダンスを通じて再解釈され、ポジティブな表現として受け入れられるようになった過程を示している。

とくに、「オムツを履く意味を各自が見出した」ことは、ワークショップの特徴である「受容のプロセス」と密接に関連している。

しかしながら、本研究では参加者の語りの一部を紹介するにとどまり、ワークショップのプロセスを通じた認識の変容がどのような要因によって促進されたのかについて、より詳細な分析が求められる。今後は、参加者個々の経験を時間的に追い、どのような過程を経て変容が生じたのかを明らかにすることが課題となる。

4.3 観客の語りから見る社会的インパクトの可能性

観客の語りの中でも印象的なのは、2024年11月12日のパフォーマンスを観たダンサーBさんの母親のエピソードである。ワークショップにも参加していたBさんの母親は、パフォーマンス終了後、Bさんにこう語った。

「なんで人様の前でオムツを履いている姿を見せてるねん」

Bさんは「やっぱりそういう反応か」と思った。しかし次の瞬間、母親はこう続けた。

「じつは、私も履いてるねん」

Bさんは衝撃を受けたという。それは、自分の母親がオムツを使用していることを全く知らなかったことに加え、これまでの母親であれば、自らの身体的状況について娘であるBさんに率直に語るとは考えられなかったというのである。この発言は、パフォーマンスを通じて母親自身の内面に変化が生じ、それが家族間のコミュニケーションにも影響を及ぼした可能性を示唆して

いる。

このエピソードは、ダンスという身体表現が単なる舞台芸術にとどまらず、観客の価値観や心理に深く働きかけ、隠されてきた身体的現実を言葉として表出させる契機となり得ることを示している。とりわけ、この出来事は B さんの母親個人の変化にとどまらず、母と B さんの関係性にも影響を及ぼした点が重要である。単なる観客としての視点ではなく、親子間の関係性を見直すきっかけとなった可能性がある。

もっとも、このエピソードは一例に過ぎず、本ワークショップが社会的インパクトを与えたと断定するにはさらなる検証が必要である。今後は、より多くの観客の語りを収集し、パフォーマンスがどのように受容され、どのような変化を引き起こしたのか、そのプロセスを精緻に分析することが求められる。

4.4 今後の課題

本ワークショップは、その後、京都芸術センターでのショーイング（2024年10月22日）⁽¹⁵⁾ および同センターで開催された明倫フェスタでのパフォーマンス（2024年11月12日）⁽¹⁶⁾ において、ほぼそのままの形で観客の前で演じられた。さらに、2024年9月22日（日）および23日（月・祝）には、「路地裏の舞台にようこそ」⁽¹⁷⁾ というイベントにおいて45分のダンス作品として上演されている。筆者はこれらすべてを鑑賞したが、とくにダンス作品は完成度の高い、印象的な作品であった。しかし、このダンス作品は、今回検討したワークショップをベースとしながらも、さまざまな変容が見られた。

これまでのワークショップの参加者へのインタビュー、ショーイングやパフォーマンス、あるいはダンス公演に出演したダンサーの語り、それを観た観客の感想については、まだ十分な検討が行われていない。これらの要素を詳しく分析することで、本ワークショップの取り組みが社会に与える影響、すなわち社会的インパクトをより深く明らかにできるだろう。

以上の状況および本稿の成果を踏まえ、今後の課題として以下の3点を挙げる。

1点目は、ワークショップが参加者の価値観に与えた影響をより体系的に分析することである。本ワークショップでは、参加者がオムツに対する価値観をどのように変容させたのかが示唆されているが、その変化のプロセスや要因をより詳細に検討する必要がある。

2点目は、観客の視点をより多角的に検討し、ワークショップの社会的インパクトを広範な視点から分析することである。Bさんの母親のエピソードに見られるように、観客の価値観にも変化が生じる可能性があるが、その影響の範囲やプロセスについては、さらなる検証が求められる。

3点目は、ワークショップでの探究が舞台表現へと発展するプロセスをより詳細に検討し、芸術的表現と社会的メッセージの関係を明らかにすることである。ダンス作品としての上演では、ワークショップの試みがどのように形を変え、またどのような新たな意味を獲得したのかを分析することが重要である。

今後も本ワークショップの展開を追い、ダンスという身体表現を通じた価値観の再解釈の可能性を探求していきたい。

謝辞

動画撮影、アンケート、インタビューなどの調査を許可して下さった市川まや様、それらの調査に快く応じて下さった Kyoto Dance Exchange のみなさま、外部参加のダンサーのみなさまに深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

注

- (1) <https://kdedance.fc2.page/?p=679> (最終閲覧日：2024年12月23日)
- (2) 本稿で使用している写真は全て筆者が2023年10月15日(日)に開催されたワークショップにおいて撮影した映像から作成したものである。
- (3) Kyoto Dance Exchange (代表：市川まや)「2007年に京都芸術センターで行われたワークショップ「Liz Lerman Dance Exchange (リズ・ラーマンダンスイクスチェンジ)」に影響を受け、2008年に結成したダンスカンパニーである。現在、幼児～70代のメンバーが在籍し、「ダンス」に相応しい体形・年齢・経歴・生活等に捉われない、本来の「踊る」行為から生まれる感情や意思の伝達、表現、交流を目的とするコミュニティダンスを軸に活動している。」<https://kdedance.fc2.page/?p=175> (最終閲覧日：2024年12月24日)
<https://kdedance.fc2.page/?p=679> (最終閲覧日：2024年12月23日)
- (4) <https://kdedance.fc2.page/?p=679> (最終閲覧日：2024年12月23日)
- (5) エリエールの大人のパンツ「アテント」は、そのマニフェストの冒頭で「かくさないパンツになろう」と呼びかけ、「大人用紙オムツの #常識をはきかえよう」と以下のように述べている。「アテントは、この地域共生社会の理念に共感し、今後世代を超えて大切な問題となる「介護の社会化」に取り組みます。そして、お客様一人ひとりにとって、自分自身の問題だと捉えてもらいたいと願っています。そのために、アテントは大人用紙オムツを下着の総称である「パンツ」と呼び、「かくさないパンツ」をコミュニケーションワードとして、オムツを恥ずかしいものとして隠すのではなく、オープンにしてみんなで考えていけるポジティブなものに変えていきたいと考えています。大人用紙オムツと私たちとの間に横たわる問題を世の中化する。大人用紙オムツに対する向き合い方をポジティブに変え、大人用紙オムツを幸せな老後への生活必需品に変えていきたいと思っています。」
<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000334.000001310.html>
<https://www.elleair.jp/attento/talk/> (最終閲覧日：2024年12月23日)
- (6) ソーシャルアートとは「社会課題にコミットし、人間どうしの新しいつながりを生み出す芸術実践」。
<https://artarea-b1.jp/program/1512/> (最終閲覧日：2024年12月23日)
- (7) コミュニティダンスとは、「年齢、性別、障がいの有無、宗教、人種、ダンスジャンルや経験にかかわらず、「誰もがダンスをつくり、踊ることができる」という考えのもと、アーティストが関わり、「ダンスのもつ力」を社会の中で活かして行く活動」。
<https://cdj.jcdn.org/about01/> (最終閲覧日：2024年12月23日)
- (8) 茨木市文化振興財団が主催し、筆者のゼミが協力して実施している「みんなでダンス in Ibaraki プロジェクト」のワークショップ
<https://www.ibabun.jp/event/2024dancers/> (最終閲覧日：2024年12月23日)
- (9) 茨木市文化振興財団が主催し、筆者のゼミが協力して実施している「みんなでダンス in Ibaraki プロジェクト」のダンス公演
<https://www.ibabun.jp/event/20241208/> (最終閲覧日：2024年12月23日)
- (10) 京都を拠点とするおやじダンスカンパニー「一般社団法人 ロスホコス」
<https://www.facebook.com/loshocos/> (最終閲覧日：2024年12月24日)

- (11) KDE のメンバーは、『ジゼル』について以下の動画を視聴し学習を行った。
3分でわかる新国立劇場バレエ「ジゼル」
<https://youtu.be/Ls8ot4F-cRo>（最終閲覧日：2024年12月24日）
【徹底解説】ジゼルのストーリー解説してみた！【バレエ】
<https://youtu.be/A1NOAa6ALkU>（最終閲覧日：2024年12月24日）
‘Giselle’-Act I-Natalia Osipova and Andrey Merkuriev
<https://www.youtube.com/watch?v=Q0lYqHZs6bI>（最終閲覧日：2024年12月24日）
Giselle Act II-Natalia Osipova, Leonid Sarafanov
<https://www.youtube.com/watch?v=vRHUK7CCh-Q>（最終閲覧日：2024年12月24日）
Giselle Mats Ek with Ana Laguna, Luc Bouy, Yvan Auzely, The Cullberg Ballet
<https://www.youtube.com/watch?v=7L48JEQ-5zg>（最終閲覧日：2024年12月24日）
Akram Khan’s Giselle: The Creative Process|English National Ballet
https://www.youtube.com/watch?v=cs2nsC_pchw（最終閲覧日：2024年12月24日）
English National Ballet|Akram Khan’s Giselle|Exclusive clip
<https://www.youtube.com/watch?v=AcBuahXSiWU>（最終閲覧日：2024年12月24日）
Akram Khan’s Giselle: Madness (extract) |English National Ballet
<https://www.youtube.com/watch?v=01Qf9ypbcq4>（最終閲覧日：2024年12月24日）
Akram Khan’s Giselle: The Wilis (extract) |English National Ballet
<https://www.youtube.com/watch?v=INOETiC9eeA>（最終閲覧日：2024年12月24日）
- (12) 2024年10月9日（水）13時から15時。枚方市にて実施。
- (13) この日のワークショップは、筆者がビデオカメラで録画を行った。本稿のワークショップの説明はそれを資料としたものである。
- (14) チェリッシュとは、1968年に結成された日本のフォークソング歌手グループ。松崎好孝と松崎悦子の、愛知県出身の夫婦デュオ。
<https://yumeconcert.com/guestartist/cherish>（最終閲覧日：2024年12月24日）
- (15) ダンスワークショップショーイング「ジゼル～そう遠くない未来、私はオムツを履くだらう～」
<https://kdedance.fc2.page/?p=679>（最終閲覧日：2024年12月24日）
- (16) 明倫フェスタ 2023
<https://kdedance.fc2.page/?p=735>（最終閲覧日：2024年12月24日）
- (17) 路地裏の舞台にようこそ 2024
<https://rojibuta2024.wordpress.com>（最終閲覧日：2024年12月24日）
<https://kdedance.fc2.page/?p=775>（最終閲覧日：2024年12月24日）
<https://kdedance.fc2.page/?p=872>（最終閲覧日：2024年12月24日）

参考文献

- 一般財団法人たんぽぽの家編『ソーシャルアート：障害のある人とアートで社会を変える』、学芸出版社、2016年
- 稲田奈緒美「日本におけるコミュニティダンスの導入と展開」、『桜美林論考 人文研究』第11号、桜美林大学、2020年、p.1-19
- 刈宿俊文、佐伯胖、高木光太郎編『ワークショップと学び1 まなびを学ぶ』、東京大学出版会、2012年
- 小泉朝未「ダンスワークショップで実現する表現の考察」、『メタフェシカ』、大阪大学大学院文学研究科哲学講座、2017年、p.89-102
- 砂連尾理『老人ホームで生まれた〈とつとつダンス〉：ダンスのような、介護のような』、晶文社、2016年
- シ ril・ボーモント 佐藤和哉訳『ジゼルという名のバレエ』、新書館、1992年（1944年）

2024年12月25日受理